

第1回 県立赤城公園の活性化に向けた基本構想案の有識者意見交換会 議事要旨

日時：令和4年2月18日（金）14:00～16:00

場所：群馬県庁 環境森林部会議室(Web)

1. 開会

2. あいさつ、自己紹介

3. 意見交換

事務局：県立赤城公園の現状、公園内の県有施設等の状況、今年度及び次年度以降のスケジュールについて説明。

(1) スケジュール内の官民共創ピッチについて

E委員：官民共創ピッチの成果は、どんな状況か。

事務局：他の県立公園も含めて、企業、民間事業者に出店、参画の呼びかけをした。

10社の参加者があり、5社から具体的な話を聞きたいという問合せがあった。

社内検討などもあり、具体的に参画をするという動きはない。

(2) スケジュール内の「あかぎ会議」について

C委員：今年度2回開催しているが、どのようなメンバーでどのように進めたか。

事務局：地元事業者及び関係者から構成され、1回目は「赤城の魅力」をワークショップ形式で話合った。2回目は、1回目で出された魅力について、基本構想策定業務委託先が整理し反映させた構想案の素案を提示し、その後、グループに分かれて、季節ごと、訪れるペルソナを設定し、赤城山の魅力を堪能できるツアーを企画設定し、旅行者が滞在するためのイメージ作りの作業を行った。

C委員：構想案の素案に対する反応はどうだったか。

事務局：地元として大きな反発はなかった。参入した事業者が一人勝ちでは困るという意見があり、地元も一緒に盛り上がり、経済効果を上げるため参入事業者と共に発展する仕組み作りが重要と考える。

事務局：基本構想案の概要版について、説明。

(3) 基本構想のビジョン・コンセプトについて

A委員：前橋市には「めぶくグラウンド構想」がある。赤城山エリア、敷島エリア、市街地エリアと分けて既存基盤を組み合わせ、新たな価値を創造する。大沼等の湖畔でも、日頃ITを使って仕事をする人達などが自然の中で心を休ませたり、自

然を楽しみながら仕事する環境があればいいと思う。赤城の魅力は手付かずの自然だと考えている。観光人口をかつての100万人に戻すという方針であると、人の少ない空間でゆっくり心と体を癒やそうという人達から敬遠されることも考えられる。単に宿泊施設等が充実して、観光客が大勢来るとなると、富士五湖の一つである山中湖で良いということになってしまう。

絞り込んだエリアで、2泊3日ゆっくり過ごしてもらえば問題ないが。

各論になるが、覚満淵は木道以外一切、人工構造物を見せないなどのこだわりが非常に必要だと思う。

赤城山のウェルビーイングとは何を指すのか、賑わいを求めるのか、この部分はもっと真剣に考えた方がよい。中途半端な開発をしてしまうと、簡単に元に戻せなくなってしまう。基本構想にアイデアを盛り込み過ぎて、何を指しているのかが分かりにくくなっている。スローシティや自然というコンセプトに特化した内容にするなど、地元の方とよく相談した方がよい。官民連携をするのであれば、既存の厚生団地が部分的に朽ち果てているので、その場所を民間が取り壊して、スローシティな生活を送るといった方がよいのではないかと。

B委員：基本構想案の中で横文字が多すぎるという印象を持った。赤城山に住む地元の方々が読んだときにどう思うのか、構想案に付いてきてくれるのか心配なところである。赤城の良さは手つかずの自然、景観の良さなので、覚満淵の木道を歩いていて自然の中に宿泊施設が見えるのはどうかと思う。

各施設は建てたときはきれいだと思うが、5～15年経った時に古びた建物が改修費用の調達が厳しく、改修されずに残ってしまうのではないかと不安になった。

キャンプ場にコテージやグランピングサイトを集約した方が5～15年後を考えたときに良いと思った。ビジターセンターは、現在トライアルサウンディングを導入しているが、今後、機能が活性化されて、ビジターセンターの意義をより拡充していくと、良いものができるという印象を持った。

C委員：観光人口100万人を目指すのかは重要な議論だと思う。単純に人口を増やすのではなく、自然に対して意識の高い人を呼び込むのが重要と考えるが、反面、経済を回していくことも全く無視出来ないと思う。観光人口は増やさないと経済を回すには、意識の高い人の滞在時間を増やすことだと思う。最近の傾向として、キャンプ、グランピング等は短いスパンでブームが去ってしまうという潮流ではないと思う。

ワーケーションが出来る環境(WiFiなど)を整備することなどは大切。赤城山が他県等で知られていないことが残念。もっと赤城山を知ってもらうことが大切だと思う。アウトドアやスポーツイベントを開催し、赤城山の存在を認知してもらうことで、行ってみようという動きが出てくる。意識の高い方が来てくれる

イベントというものがあるので、そういったものを多く開催していくと良いと思う。例えば、琵琶湖の西岸にびわ湖バレイというスキー場がある。そこにテラスを作ったら注目され、一つの拠点としてアウトドアの様々なアクティビティが生まれた。ハード整備も良いが、赤城の自然にマッチした取組が必要と考えられ、赤城山から見る夜景もきれいなので、ナイトトレッキングなども良い。

インタープリターなどを中心に自然をもっと知ってもらえるような取組をしっかりやった方が良いと思う。

D委員：基本構想案のコンセプトは非常に重要だと感じた。当園のコンセプトは、「自然との共生」ということで、新しい自然形成のモデルになるということ。今回の官民共創による活性化について、どのように進めていくのかイメージが出来ない。前橋市のスローシティの構想は素晴らしいと思う。この構想と連携しつつ、赤城山エリアでの思い・取組をどのように発信していくのが大切である。当園も約30年前、造園をするにあたり、「本物が重要」ということになり、本物とは何か、そのためには何が必要かを考えた時に、「人を圧倒させるもの」が必要ということだったのだと推測する。赤城公園でも、「本物」をもっと見せられるようになると良い。

E委員：構想案は横文字が多い。この構想の中でレジリエンスは何を指しているのかが分かりにくかった。どういう言葉に結び付いているのかはっきりさせた方がよい。国立、国定に比べて県立赤城公園は、誘致圏が狭いと思うが、どこまで誘致圏を想定するのかを考えてもよい。かつて観光地の価値は、誘致圏の広さで決まると言われていた時代もあり、遠くに住む方にも来てもらって楽しんでもらうのも一つの戦略である。京都や富士山などの誘致圏は広く、47都道府県になる。

赤城はかなり魅力的な自然があると感じた。湖畔に近い場所でキャンプが出来るのは非常に魅力だと感じる。例えば、アメリカの国立公園に隣接する周辺地域ではバギーカーで遊べるなど、本格的なアクティビティ体験が出来るようになっている。

一方、国立公園内では利用によるインパクトを避けるよう管理運営している。その位置付けも大事である。ゾーニングの話にもなるが、魅力をどのように打ち出すのが大切であり、山頂に住む方々の生活文化も大切である。地域の自然を守っていききたいという思いもある一方、どうやって稼ぐのかも考える必要があり、なかなか難しい部分があると思う。

例えば、イギリスのある地域ではハーブしか栽培していないのに、そこの方々は、すごく自慢してくる。一見、大したことではないと思うが、食材を地域で調達し、地域の中で循環させるという重要な仕組みであり、赤城山でも地域循環できるものはないか想定しても良い。

基本構想の中でデジタル技術、ICT(情報通信技術)がどのように絡むのかが

分かりにくかった。最近ではホテルの受付などICTで効率化を図るところもあるので、うまくICTを活用していくことが重要だと思う。

C委員：近年、赤城はスポーツ合宿で注目されている。東京から100km圏内で準高地トレーニングが出来る場所は限られている。大沼湖畔が標高1,300m超えであり、首都圏に住む選手達は長野や岐阜等で高地合宿を行ったりするが、もっと近い約100km圏内の自然豊かな赤城山で、それが可能なのである。

スポーツ合宿もターゲットにしても良いのではないか。赤城では滞在してみないと分からない魅力(自然現象など)が沢山あると感じる。

B委員：湖畔でキャンプがする人がいるのは、その景観が素晴らしいからだと思う。

自然保護の観点で勝手にたき火をやられては困るので、自然を損なわない形でそれが出来るような場所を整備して、提供することが大事ではないかと思う。

関東圏内周辺も無数のキャンプ場が出来てきて、施設がいいとか、新しいサービスとか自然景観も含めて、いろんな演出をして、素敵な空間を用意している。そこの差別化、代替性のない唯一無二の場所を作っていくことが重要だと思う。赤城山の魅力、地域の良さを体験し、赤城だから出来ることを盛り込む必要がある。

(4) 施設整備について

E委員：国内外のビジターセンターを調査したことがあり、ビジターセンターは立地条件なども重要。例えば、アメリカの公園では最初に訪れる場所がビジターセンターになる。無料でマップ、パンフレットが置いてあったり、案内機能、展示機能があり、自然解説の拠点になっている。その他、飲み物、ナッツ類(種類が多い)、ドライフルーツ等の物販があり、公園内をたくさん歩いて、体を動かしてというメッセージが伝わってくる。日本の公的なビジターセンターは民業圧迫を避けるため、物販を控えている傾向がある。物販が弱いので、そこからのメッセージが伝わらない。ビジターセンターを上手く活用することが重要ではないか。

県立公園であると、地元向けに自然解説をしたり、夏休みの宿題を手伝ってくれるような人を置くと良い。海外では博物館の職員が手伝っている。

ビジターセンター内に博物館機能を設けるというアイデアもあるが、そうすると非常に経費がかかり、そこは要検討である。

D委員：当園も物販に力を入れているが、そこを伸ばしていくのは難しい部分。自然環境を活かした自然体験学習で、収益を上げるということに力を入れていきたいと考えている。入園料は、別に徴収している。

プログラムを有料化して、イベント等を行うと、巡視員が足りなくなってしまう。当園では、自然解説が出来る市民などを募集して、過剰な投資をせずに、低

額な予算で小さく回していく仕組みを作っていこうと考えている。

A委員：ビジターセンターに管理人等が常駐するという体制は、お金がかかる。

アメリカでは国立公園に入るのには、入園料がかかる。大沼湖畔等も維持管理が難しいと思うので、料金ランクを分けて整備するなどの取組が必要。

お金を払って自然を楽しみたい方は、多くのランナーが目の前を走るのを見たくはない。そのためにも、ビジョン、コンセプトを最初にきちんと決めないとダメなものになってしまう。

E委員：観光とリゾートは違う。日本における観光学の研究者の中では、日本で一番良いリゾートとして軽井沢をあげる人が多い。軽井沢はリゾートの中に、観光の側面も持ち合わせている。樹林に囲まれた静穏な環境(別荘地など)で静かに過ごし、軽井沢銀座などで賑わいを楽しむ。観光とリゾートの違いは、前者は刺激を求めるもので、後者は弛緩を提供するもの。観光的な性格は、軽井沢のようにリゾートと共存出来るものではないか。そのためには、公園内での目的ごとの区域分け、ゾーニングが大切である。自然公園は自然風景地である。風景をどの場所からどのように楽しむのかを整備することが重要である。

アメリカの国立公園(イエローストーン)では、インスピレーションポイントを誘導する標識があったりする。赤城公園の中には、沼があるのでいい雰囲気に出るのではないかと。ただ、日本では法令の絡みもあり、河岸や海岸などのウォーターフロントは海外のような高級感のある雰囲気を表現、実現できていない。自然保護を図りつつ、開発がどこまでできるのか。自然、景観を維持しつつ施設整備が図れるのではないかと。

B委員：赤城公園をどう見せていくのか、ビューポイントはどこか。ある種の誘導とゾーニングが重要になってくる。守るべき場所と活用すべき場所を分ける、うまく設定する必要がある。日本国内では施設が改修されずに朽ちてしまい、景観を悪くしてしまうことがある。整備後の維持管理も含めて考えていく必要がある。

A委員：(脱炭素社会の観点から)再生可能エネルギーを活用していくべきだが、赤城公園の中では絶対に太陽光パネルの設置はやめて欲しい。あの自然の中で太陽光パネルは見たくない。走る蓄電池である電気自動車であれば、キャンプも電気自動車の給電機能で自前の電源を使って環境にやさしく楽しむことができる。キャンプ場自体が、EVエリアとしてPRすることができると思う。

B委員：各施設の運営者は、スノーピークになるのか。

事務局：運営については、基本設計を進めながら、公募で決めていく。

C委員：覚満淵の木道、コテージのイメージは。従来のものとどう違うのか。

事務局：木道、コテージともに高層湿原など希少植物エリアには手を付けない形での整備になる。キャンプに慣れていない人でもゆったり過ごせるようにとのことで、コテージの案が出てきた。基本構想の中では、あくまでもイメージになる。ただ、覚満淵のビューポイントを上手く活用したいという思いがあり、このようなアイデアとなった。

4. 閉会

環境森林部長：基本構想をどう実現していくのか課題だと感じている。整備費もかなり大きくなるので、県と市だけで負担するのは難しいと思う。施設整備をどう進めるのか、また管理運営をどうするのか、また皆様からご意見をいただきながら検討していきたいと思う。引き続き、ご助言をいただければ幸いである。

以上